

## クリシュナムルティの教えにおける人間、自然、リアリティ

《以下は、クリシュナムルティの家庭教師を任じたこともあり、また、星の教団の活動にも重要な役割を果たした、E・Aウッドハウスが書いたもので、クリシュナムルティの教えの画期的な意義を指摘した貴重な論考である。》

あらゆる問題に、散漫な推論のプロセスによってではなく、ある中心的な真理に直接訴えることによって対処するという、クリシュナムルティによって採用された特異な直観的教え方は、それを見守ったことのある人々にとってはきわめて印象的なものである。多分、なによりもこのゆえに、多くの人々は彼のことを本能的に「教師」と括弧付きで書くことによって区別すべく促されてきたのである。人々は、それが非凡な教えだと感じたのだ。それには偉大さの刻印が押されている。それは、人類の マスター 師 / ティーチャー 教師 の系譜に属しているのだ。

が、他の人々にとつては、それを伝えることがまったく不可能な何かであるという、不可避的な不都合をそれは持つている。で、これは、時々起こることなのだが、クリシュナムルティの教えを学んでいる人が、友だちに彼のメッセージの概要について尋ねられ、その根本的真理を選び抜いて示すよう乞われた時、現実の困難として感じられる。このように挑まれた人は、ただちに次のことを発見するからである。すなわち、他の人にクリシュナムルティの教えを提示

するためには、クリシユナムルティ自身の中では実に見事に、かつ容易に働いているものとはまったく異なるテクニクが必要だということである。

クリシユナムルティが話している時、まさに彼が常にありありと彼自身の生きた真理を眼前にしているという事実が、ある摩訶不思議な仕方で彼の聞き手に伝わり、多くのものごとを容易に思わせるのだが、実は少しも容易ではないのだ。これこそはまさに、自称解説者がただちに見出すことなのである。人が実際に彼に傾聴していた時には実に明白に思われた連関が、今や論理的思考の相関関係へと翻訳されなければならない。彼が指摘した時にはほとんど言うまでもないように思われたことが、今や、論証で補強されなければはやけてしまうのである。クリシユナムルティ自身にとつては、生きた統一体として即座に把握され、すべての教えを有機的全体へと融合していたものが、今や、知的な相互依存として表明されなければならない。要するに、必要とされるものはまさに、彼自身はまさにそれ自体であるがゆえになすすますることができ、そういう秩序・方式の枠組みなのである。さもなければ解説は役に立たず、話を聞きに来た友だちは手ぶらで立ち去らざるをえないであろう。

私がこのことを痛感せざるをえなかったのは、一年前、とりわけクリシユナムルティの教えに興味をそそられ、しきりに知りたがっていたある友人がやって来て、彼の教えのどこに他の教えにない新しさがあるのかと彼に訊ねられた時である。未来の時代に人々がクリシユナムルティの生涯とメッセージを振り返って見る時、スピリチュアルな人生哲学への彼の偉大で卓越した寄与として、彼らは何を指摘するだろうか？

私は自分がどう答えたか忘れたが、しかしそれが絶望的なほどしどろもどろで、不適切であったことを知っている。クリシュナムルティと彼のメッセージとの数年間にわたるかなり密接な接触後、私は自分がその教えを一個の生きた興味ある全体として総合的に把握していないことに気づいた。そこで私は、その教えに取り組み、なんとかして真相を見極めてみることに決めた。この点で、私に投げかけられた質問をテストケースと見なした。それは、いやしくも真面目な学徒だったら明瞭な答えを返すことができるべき質問だと私は感じたのである。その上、それは私の興味をそそった。他のほとんどの学徒同様、私は教えの新しさを感じていたからである。事実私は常に、それらの秘密がそっくり解明されれば、物理学の領域でアインシュタインによってもたらされた革命に勝るとも劣らないほど画期的で遠大な何かをクリシュナムルティが彼自身の分野で成し遂げたことがわかるであろうと感じていた。が、何を彼が成し遂げたかを正確に言うことはできなかった。

この問題について数カ月間熟考した後私は、一九三〇年六月、エルダー城〔訳注 一九二九年に星の教団 が解散されるまで、教団の拠点として使われていたオランダの古城〕に行き、そこで一夏を過ごした。到着後三週間ほど経ったある日の朝、（城のまわりに掘った）壕ぼりを見下ろすあずまやの一つでいつものように仕事していたのだが、なんのはっきりした考えも浮かばぬまま、一、三のとりのめない文章を書いていた。しかしながら、私がこれらにざっと目を通した時、私が追求していたもののヒントをそれらが含んでいるということ、非常にぞくぞくする思いとともに見出した。それ以来、そのヒントに含まれている可能性を伸ばすべく苦心してきた。この論考はその結

果である。

言うまでもなく、この論考にはいかなる権威づけも目論まれていないし、また、これが全部の真理を明らかにしたともし私が想像したら、傲慢のそしりを免れないであろう。これはあくまでも一学徒の試論であり、大きな主題の周縁に触れたにすぎない。私に言えることはせいぜい、この論考で説明しようとした中心的論点が私にとつて個人的に啓発的であり、そしてクリシュナムルティの教え全体の理解へと少し近づくのを助けてくれたということだけである。この試論は、すでに述べた問い　どこにクリシュナムルティのメッセージの偉大な新しさがあるのか？　未来の時代は、スピリチュアルな人生哲学への彼の卓越した寄与として何を指摘する見込みがもつとも高いだろうか？　に対する答えを出すための実験的試みと見なされてよいであろう。

追放された存在としての人間

世界中のあらゆる個人は、周囲を見回す時、自分のことを広大な自然に取り囲まれた一個の生きた存在として意識し、さらに自然はその彼方の究極のリアリティ「訳注 神、創造主、真実在など」に依存していると感じる。そしてまた彼は、このリアリティは、もしそれが理解されさえすれば、自然の意味と目的を明かし、そしてこの説明によって、全体の部分としての彼自身の意味と目的を派生的に明らかにするであろうと感じる。言い換えれば、包括的なスピリチュアルな真理は、これら三項を以下の順序で一つの有機的総体の部分として関連させるであろう。それは、自然を

究極的リアリティが顕現する場として説明し、また、人間を自然の一部として、自然自体の生命の意義に彼を関連させることによって説明するであろう。で、このようにして、それは自然の中に人間にとつてのわが家を見出すであろう。彼女（自然）は彼の母になるであろう、他所者<sup>よそも</sup>ではなく。そして、まさに彼女の生命<sup>いのち</sup>が働き出す過程が、彼自身のスピリチュアルな自己実現の過程になるであろう。

そのような真正の自然哲学を、人間の中のあらゆる詩的・神秘的な部分が切望してきた。彼の中には、自然を犠牲にして求められるべきものとしての真理ではなく、彼を自然の中に包み込むべき存在としての真理を求める深い本能が常に存在してきた。人間は、心の奥底では、自然界から追放された存在であろうとは願っていない。たとえそのような存在であることが優越のしるしと解されようと。いかなる孤高のプライドよりも、母なる自然の呼び声のほうが常に強かつたのである。人間のもつとも内奥の魂は、彼自身の自己実現を自然的生活によって解釈するであろう哲学を求める。自然の外においてではなく、その中において、彼は自分のスピリチュアルな運命を開拓しなければならないのである。

### 諸宗教の答え

が、過去の宗教的・スピリチュアルな教えは、人間が所期の目標に向かうのをどのようにに助けきたらう？ 例外なく、それらは彼を自然から分離してきた。なぜならそれらは、自然の中

での、またそれを通じてのリアリティの働きを、人間の問題に適用しうる用語に翻訳することができなかつた（または翻訳せずにきた）からである。三項　リアリティ、自然、人間　を生きた有機的連鎖へと相互に関連させ、自然をリアリティに依存させ、人間を自然に依存させるかわりに、一種自暴自棄になつて、非常手段で難問題を解決すべく、人間を究極のリアリティに直接関係させ、介在する自然とは基本的に無関係にするか、または単に否定的に関係させるに至つたのだ。つまり、過去の宗教的・スピリチュアルな教えは、人間のスピリチュアルな自己実現を、自然に対立して、またはその外側で成し遂げられるべきものとして説いてきたのである。それらは人類に、真の人生を探すためには、顕現した事物の秩序ではなく、顕現した世界の外側またはその彼方に目を向ける必要があると教えてきた。要するに、それらは、リアリティと人間との間の中間項としての自然的秩序を廃止してきたのである。三重秩序の経験を全体として調和させることができたであろうあの理想的総合が、真ん中で断たれてしまったのだ。自然から人間へと下降する一個の有機的真理であるべきだったが、短絡させられてしまったのである。人間はもはや、母なる自然　の手からスピリットの贈り物を受け取らない。彼はそれを、リアリティから直接求めるよう告げられるのだ。

#### 理由

なぜこうなつてしまつたのだろうか？　なぜなら、過去のすべての偉大なスピリチュアルな教え

においては、リアリティと自然との関係は、自然から人間に手渡されうるものが何もないように仕組まれてきたからである。これらすべての教えは、人間にとつてのスピリチュアルな自己実現はスピリチュアルな幸福を意味し、また、至福への彼の深い本能的要求を否定したり無視したりする、いかなる人生問題の解決も容認できないということを確認してはいたが、しかし根本的に幸福な自然観からわき出さないようないかなる真正の「幸福の福音」もありえないということを確認してこなっていた。

おしなべて、それらは顕現を不幸なものにしてしまい、したがって、幸福を自然ゆえにはなく、自然にもかかわらずあるものと説いてきた。自然は、万人にとつて敵であつて、友ではないのであつた。そして、このように考えて、それらはリアリティと自然と人間の間の連続性を断ち切ってきた。人間とリアリティを直結させ、自然を外側に追いやったのである。

### 中和と逃避の教え

これが本当であることは、ほとんど論証を必要としない。すべての容認された宗教の根底には、実現されていないもの・はるか彼方のもののために現実を否認する傾向があつた。それらすべては一樣に、形態と物質の中の生は根本的に監禁であり、顕現は重荷であつて、それゆえ、ありのままの事物の世界にはなく、何か他の存在秩序の中に幸福は見出されるべきだ、という仮定から出発している。したがって、それらすべての宗教は、人間にとつてのスピリチュアルな自己実

現を、「中和 neutralization」または「逃避 escape」の点から説いてきた。彼は、重荷の重さを感じないでいられるほど充分に強い何らかの能動的原理をみずからの内部に据えることによって、重荷を中和させることができるか、または、重荷をかなぐり捨てて、それから逃げ出すことができる。これら二つの代表的な解法のいずれかに、過去のすべてのスピリチュアルな教えを分類することができる。中和の宗教は、人は生存の重荷を感じないでいられるほど強く愛することができる、または、重荷を試練と見なすことによって、それをその功利的な側面において、何らかの異なる人生への準備として迎え入れることができる<sup>と</sup>説いてきた。逃避の宗教はそれよりはるかに断固としていた。「今すぐ逃げ出しなさい」がそれらの宗教のスローガンであった。「顕現の全秩序に背を向け、あなたの実現を純粹な非顕現の 存在 の領域において求めよ」。

ここでは例証する余地はないが、もし読者が世界の諸宗教にざつと目を通してみれば、形態と物質の中の生に固有のこの厭<sup>いと</sup>わしさの感情は、全時代を通じて世界のスピリチュアルな生活の基調であったということに同意されるであろう。その生活の根底には、「今・ここ・これ」についての深いパシミズムがあつた。そして幸福に至る可能性についてどのような希望を人類が抱いていたとしても、すべては、あれこれの仕方、「未来・そこ・それ」の言語に翻訳されてきたのである。



## 神秘主義とオカルティズム

顕現した秩序についてのこの基本的に不幸な見方において、神秘主義とオカルティズムという、自己実現についての概念的プログラムにおいてかくもかけ離れた思想流派が共同戦線を張ってきた。神秘家にとってと同様にオカルティストにとっても、形態と物質の中の生はまさに自由の否定なのである。両者ともに、それぞれのやり方で、その生から非顕現の世界へと逃避すべく努めてきた。極端な神秘家は、外面的な事物の世界を徹底的に拒否することによって、オカルティストは、一連の漸進的な拒否によって、それによって彼は、一つの顕現の秩序から他のそれへと、離れたばかりの秩序を一步一步拒否しながら、顕現の重荷がより執拗ではなく、物質がより微細で、より堅固ではなくなる、そういう存在の領域へと絶えず上昇することをめざし、かくして、結局は頂上にある自由に至ろうとする。両者にとって、解放は、その究極的または形而上的意味では、顕現からの完全な逃避によってのみ成し遂げられうるのだ。ある真の自由のみがありえ、そしてそれは監禁域プリズン・エリアの外側にある。神秘家はこの自由を、壁を突破することによって求めようとする。オカルティストは、彼の監獄の階から登り、とつとつ屋根の上に踏み出すことによって。相違は単に方法のそれにすぎない。ともに自然または自然の秩序を拒み、その外に生の実現を見出す。ともに、最後の手段として、事物のありのままに対して積極的に抗議する。

では、こうしたすべての中和と逃避の哲学がしてきたことは何であろう？

## 人間の追放

それらは、人間を自然の秩序から引き離すことによつて、彼を自然の中の流浪者、自然からの被追放者にしてきた。なぜならそれらは、この秩序を、人間自身のスピリチュアルな生活に相反するものと解釈してきたからである。この秩序内の住人として、彼は周囲を見回し、顕現界のすべての驚異と美に目をとめる。彼は四季の移ろいや、変わりゆく豊かな野や森や丘を見る。頭上の天の莊嚴と、足下の地の莊嚴を見る。このすべてを彼は見、そして多分、彼の心の隠れた場所で、哲学よりも深い深みで、ある埋もれていた血縁関係の本能がわき上がり、「私はこのすべてのものの一部だ」と感じる。が、それから彼は自分の哲学を思い出す。彼の宗教が彼に教えたことを思い起こして、悲しげに言つ。「いや。肉体的には私は自然の一部だが、しかし精神的には私は異邦人だ。なぜなら、私が求めている 絶対的な生 にとつて、このすべては重荷、監禁以外のなにものでもないからだ。自由で、かつ、顕現していない状態にあるその 生 の観点からは、花、木、石の中のこの顕現は不幸である。なぜなら、それらの中に入ることによつて、絶対的な生 はそれ自体の自由を否定するからだ。で、私もまた自由、絶対的な生 を求めているので、私が求めているものをここ（花、木、石の中のこの顕現）に見出すことはできないのだ」。したがつて彼は自然から顔をそむける。子としてのあらゆる本能にもかかわらず、彼は彼女（自然）の中に 母 を見ることができないのだ。彼は彼女の中にスピリチュアルな幸福を見出すことができない。まさに彼女の存在自体が、絶対的な生 にとつては不幸なのである。

かくのごときが、中和と逃避の哲学の結果である。それらの見地では、リアリティはその祝福を、自然を通じて人間に伝えることはできない。なぜなら、自然はその祝福の否定だからである。リアリティは、自然を通じてその自由を人間に伝えることができない。なぜなら、自然はその自由を取り去ったからである。したがって、顕現の世界の中では、人間はスピリチュアルな余所者よそもものに留まる。彼は自然からの相続権を剥脱されたのである。自然が与えるものが何も無いという単純な理由のゆえに。

もし物事がその逆であつたら

が、もし物事がその逆であつたら？ もし顕現が、監禁状態への転落と見なされるかわりに、喜ばしいことと見なされることができさえしたら？ もし 絶対的な生 が、単に虚無の中に見出されるかわりに、そのすべての純粹さと自由において、形態と物質によつて押しつけられた状態の中に見出されることができさえしたら？ もし人間の中の生命の働きが、自然の中の生命の働きを引き継ぎ、実現したものであることが示されることができさえしたら？ もし究極的幸福の実現が、顕現にもかかわらずではなく、顕現のゆえに可能であるとしたら？ で、もしその幸福がいつか未来にではなく、「今・ここ・これ」に属しているとしたら？ その時にはすべてが違つてくるであろう。物事の連続性は、その時にはさえぎられず、そして自然はもう一度リアリティと人間との間の中間項としての地位を占めるであろう。彼女を通じて、リアリティは人間に

流出してくるであろう。そして彼自身のスピリチュアルな自己実現を成し遂げることによって、人間はみずからを通じて自然の目的を達するであろう。こつして、真の「自然宗教」、「ありのままの物事の宗教」が発達し始めるであろう。拒絶の宗教は受容の宗教にとつて代わられるであろう。ついに、詩人や夢想家たちが夢見てきた「自然なる生」が可能になるであろう。スピリチュアリティの歴史上初めて、自然は人間のわが家になっていることであろう。

何をクリシユナムルティはしたのか

さて、もしわれわれがクリシユナムルティの教えの根本原理まで突き詰めれば、彼の教えがわれわれのためにしてきたことは、まさに以上述べたすべてのことであることがわかる。クリシユナムルティの哲学の新鮮さは、私はそれがいづれスピリチュアルな思想の新時代を画したものと認められるであろうと感じているのだが、彼が、私が話していた有機的連鎖を復活させたことにある。彼は、自然ないし顕現を、リアリティと人間との間の媒介項としての座に再び据えなおしたのである。そして彼がこれを成し遂げたのは、スピリチュアルな天才の真の本能でもつて、ぜひ必要なものとして先ほど述べられたばかりのあらゆるものをわれわれのためにしてくれらる公式を見出したからである。それはわれわれに、生 またはリアリティの観点から、なぜ顕現が幸福なものであるのかを示してくれる。それはわれわれに、絶対的な生 彼の哲学は、その自由は顕現の外側およびその彼方においてのみあるとしか示すことができなかつた は、

顕現の中でその純粹さを少しも損なうことなく見出されるはずだということを示す。それはまた、人間のスピリチュアルな自己実現は、これまでは自然に反抗して成し遂げられなければならなかったのだが、一転して、すでに自然の中で働いている何かを人間が単に引き継ぐか、伝達されて続けることによって、成し遂げられるはずだということを示す。とりわけそれは、人間の内なるスピリット がその生得権として知っている究極のまたは形而上的幸福と自由が、いかにして「ありのままの物事」の世界でかち得られうるものであるか、それをかち得ることが可能になるのは、形態と物質の中の生命の状態の中で、またそれを通じてのみであるか、を示す。クリシュナムルティによって説かれた絶対的解放は、顕現からの自由ではない。それは、顕現の中への解放なのだ。このように、クリシュナムルティの教えでは、存在 のすべての流れは同じ方向へ流れており、リアリティが自然を通じて成し遂げていることを、自然は人間を通じて成し遂げているのである。それゆえ、人間は自分の自由を自然の外側に探す必要はない。彼は、まさに彼女の存在に組み込まれている。彼の目的と彼女の目的は一つなのだ。

いかにして変更が可能になったのか

いかにして顕現についての全概念のこのとつもない変更がもたらされたのだろうか？ それは単に、すべての顕現した存在の根拠と見なしうるあの究極のリアリティの記述の仕方を変えることによって可能になったのである。

みずからの根拠を形而上学に立脚させるべく努めてきたすべてのスピリチュアルな思想は、通例、この絶対的リアリティをまつたき純粹さと静けさの状態にある。存在、いかなる制限によっても汚されておらず、そよとの動きによっても乱されていない。存在の無限の海として思い描き、したがってわれわれが「顕現」と呼んでいるもの、すなわち、物質と形態の中への生命の出現を、この絶対的静けさと純粹さへの侵入と見なしてきた。この観点からは、すべての顕現は制限である。なぜなら、それはあの原初の存在からそのすべての属性を失わせるからである。無限が有限に取って代わられ、絶対が特殊に呑み込まれ、無形のものゝ形態によつて束縛され、条件づけられるのだ。無条件なるものが、今や無数の条件のとりこになる。無制限なるものが、無数の事物の性質を帯びる羽目になる。したがって、まさに顕現の中に入るといふ行為によつて、リアリティはそれ自身ではなくなるのである。それは、存在から現実へと移行することによつて、何かをいや、あらゆるものを喪失したのだ。逆に、顕現した領域内に閉じ込められている生は、もしそれが顕現界から出てそれ自身の原初の状態へと戻れば、その時それは何か(またはあらゆるもの)を取り戻すかまたは再発見すると見なされなければならぬ。

### 重荷としての顕現した生命

この種の哲学にとつて、形態と物質の中の生命は必然的に制約である。もし密度が増える順に

漸次下方に続いていく物質度があるとすれば、形態と物質の中に吹き込まれる生命は、とうとう物質界で最後の幽閉状態の闇に至るまで、物質度が増す順にますますきつい監禁状態に陥ることになる。この結果、人間は、物質的条件のただ中で生きる肉体におわれた存在として、言わば、まさに最果ての制約の岸边に打ち上げられ、放置される。で、そこには、もし彼が自分のスピリチュアルな生得権と感じているあの失われた存在の純粹さに戻りたければ通過すべき、顕現のすべての層が介在しているのだ。

この「顕現悪夢」説を免れ、人間を彼の「はるかなる目標」から救出し、生の純粹さと絶対性との彼の直接的接触を回復するためには、部分的ないかなる処置も不十分であることは明らかである。物事の始まりにまっすぐに立ち戻って、顕現についてのわれわれの全概念を再構築する必要があるであろう。明らかに、「制約」観は去らなければならない。リアリティと現実との根本的關係が言い換えられなければならない。一方から他方への移行によって引き起こされるものとしてのいかなる「喪失」または「監禁」という考えも偽りであることが示されるような仕方であり換えられなければならない。絶対者は、自己を顕現させることによって何も失ってはならないのだ。物質がなんら制約ではないことが示されなければならない。原初の存在の純粹さは不変のままであることが示されなければならない。要するにわれわれは、「顕現の内なる絶対性」説を構築しなければならぬのだ。そのような絶対性は、物質と形態の宇宙の外側・彼方にのみ、またはそれに先立つてのみ見出されるといって、一般に容認された説のかわりに。

問題は、いかにしてこれがなされるべきか、である。やり方は一つしかない。ただ一種類の方

式だけが、われわれが必要としているものをわれわれに与えることができる。そしてこれは、クリシナムルティの全哲学の基礎を成している方式である。われわれの最も究極のものは、スタティツク静的であることをやめ、ダイナミック動的にならなければならない。われわれは、リアリティを動き出させなければならぬ。つい先程述べられたものとしての 純粹存在 の方式の代わりに、 純粹創造 の方式を用いねばならないのだ。

クリシナムルティの教えは、根本的な創造性の原理の上に宇宙を再構築する。 生 またはリアリティは、 純粹存在 と思いつままれるべきではない。それは 純粹活動 である。あらゆるものの奥に 顕現の全宇宙の外および彼方まで われわれは静けさの海ではなく、永遠の運動を思い描かなければならない。そしてその運動は 創造 である。 創造 は 生 であり、在ることは創造することである。創造を取り去れば、生それ自身が存在しなくなる。

結局、われわれが「顕現」と呼んだものはただ活発に創造している 生 であって、リアリティの攪乱または限定ではない。それはリアリティの自己表現である。みずからの創造性を解放し、ひいては実現しつつある創造それ自体である。それは、実際に発現すべく自由にされた、創造的に発現しようとする衝動である。ではなぜこの衝動があるのかともしわれわれが問われたら、にわかには答えられない。あえて言えば「創造のための創造」であり、そうとしか言いようがないのだ。この先には最も深い形而上学も貫入できない。なぜなら、それ以上先はないからである。

さて、 創造としての生 の公式の意義は、それが本来的に解放させる力を持っているということである。 顕現の全宇宙を、これまではその下で苦悶していた重荷からたちどころに解放す



る力を。それは、形態と物質の世界にリアリティの新鮮な息吹を導き入れ、隅々を吹き抜けさせて、すべての制限を洗い流させる。クリシュナムルティの宇宙では、常に物質度を増すいかに多くの層があるように、絶対者はもはやどこか遠くにある抽象物ではない。そのような累進的な密度の増加にもかかわらず、創造性は変わらずに留まるのだ。このことを理解するため、彫刻家に登場してもらおうことにしよう。

### 創造的活動

彫刻家は大理石で創造する。が、それよりずっと堅くなく、また扱いにくい材料で行う、他の創造的活動がある。それらのいくつかを、「最も稠密なもの」から始めて順に上向きに並べてみよう。彫刻家は大理石で創造し、画家は顔料で、音楽家は音で、そして哲学者は観念で創造する。が、彫刻家の「創造性」は、画家のそれ、音楽家のそれ、あるいは哲学者のそれより劣るだろうか？ 言い換えれば、創造性は物質の密度が増すにつれて減少するであろうか？ 明らかに「否」である。大彫刻家は、彼自身のやり方で、大音楽家と同様に創造的である。相違は単に技法のそれであって、すべての技法は、その性質上、用いられる材料によって左右されざるをえない。再び、大理石は、創造の媒体として、言葉が詩人にとって、または色が画家にとってそうであるよりも「解放をもたらす」度合いが劣るだろうか？ それは、自己表現によって彼の造形行為と創造的観念を解放させる上の有効性の点で劣るだろうか？ 明白な答えは「否」である。

解放はすべての場合に同じであり、用いられる特殊な技法とも特殊な材料とも無関係である。これは顕現した宇宙全体にも言える。もしわれわれが 創造としての生 の公式から出発すれば、生 は、それが扱わなければならないあらゆる等級の物質度の中で等しく創造的であり、それゆえそれ自体であり続ける。つまり、そこにあるのは一連の異なる創造的技法であり、そして技法の相違は、すでに見たように、創造的目的が物質と形態の中に表現を見つける時にはいつでも、すべてのレベルで起こる創造的「解放」にはなんの影響も与えない。これが、顕現の究極的幽閉状態からの超越をめざすあの形而上的「顕現悪夢」説に対する答えである。 創造としての生 は、その中に無数の特殊物が消散あるいは溶解しうる、単に青ざめた（生気のない）宇宙ではない。それは、生きたエネルギーとして、あらゆる具体物の中にある。一枚の葉を摘んでみれば、それはそこにある。あなたが石を一つ拾い上げれば、あなたはそれを掌中に収める。われわれの周りの世界はもはや牢獄ではない。それは風と青空に通じている。リアリティは他所者<sup>よそもの</sup>ではなくなり、そのすべての純粹さのまま、われわれの戸口までやって来たのである。

### 創造としての生

これをいかにしてこの 創造としての生 の公式が成し遂げることができ、またどのようにしてそれがまさにクリシナムルティの哲学自体に組み込まれたのかを理解するために、ごくありふれた事例を引き合いに出して検証してみよう。この事例は、純粹存在としての生 からこの

創造としての生 への単なる変化が、かくも長い間われわれのスピリチュアルな思想に影響を与えてきた「顕現重荷」説全部をあつという間に廃止し、またこの廃止によって、「中和」と「逃避」という、これまでの古い見解の下で論理的に可能だったただ二つの代替的方法とは原理的にまったく異なるスピリチュアルな自己実現のプログラムへと、いかにしてわれわれを導くかを示してくれるだろう。

### 解放の道具

ひとかたまりの大理石を考えてみよう。それを肩に担いでいる人にとっては、そのかたまりは重荷であり、疲れさせるもの以外の何ものでもない。そして彼がそれからの救いを得ることが出来るやり方は二つしかない。第一は、彼がその重量を感じなくなるほど不思議な、それを運ぶための感情的誘因を持っているかもしれない場合。したがって、彼は、緊急にそれを必要としている人で、彼がとても深く愛しているので、どんな奉仕も それ自体はいかにうんざりさせるものであると 喜びになる、そういう人のところに運んでいくかもしれない。あるいは、彼は、他の人がそれを運ばないですむように、それを運んでいくかもしれない。彼の動機はここでは同じである。あるいはまた、自分の筋肉を発達させるために、体操としてそれを肩に担いでいくかもしれない。その場合彼は、それが彼にしてくれる最終的な良いことのために、直接的な辛さに耐えるであろう。これらすべては「中和」の道に属する。そこには依然として重荷はあ

る 質量と重量というその顕著な特徴は残るであろう が、しかしこの側面は相殺され、何か他のものによって打ち消されたのである。他の方法は、より単純で、より直接的である。それは、肩からかたまりを外して、地面に落とすことである。これは「逃避」の道である。しかしながら、ここでさえも質量と重量が関連した事実として残る。かたまりはもはや運ばれないが、しかしそれが落とされたのは、その質量と重量ゆえである。

しかしながら、ここにある人がおり、彼にとっては大理石のかたまりは重荷でも障害でもない。なぜなら、その意味合いは彼にとつてはまったく異なるからだ。彼にとつては、それはまさに解放の手段であり道具である。その人は彫刻家である。彼に大理石のかたまりを与えれば、他の人にとつてそれを重荷にしていたのと寸分違わぬ性質が、彼の芸術の不可欠の条件と見なされるのだ。硬さと大きさは制限したり圧迫したりする要因ではなくなる。なぜなら、彼が創造することができるのは、まさにこれらによつてだからである。それゆえ、かたまりの運び手によつて「耐え難い負担」と感じられていたすべてが、単に運ばれるべき何かとしてではなく、創造的に形作られるべき何かと見なされる時は、解放させるものになるのだ。それは依然として同じかたまりだが、その性質または意味合いは完全に変わったのである。

#### 易々たる達成

これと同じことが顕現にも言える。リアリティと顕現との従来の静止的關係を創造的關係に置

き換え、形態と物質を、顕現した宇宙によって単に「担われる」べきものと見なすことをやめれば、われわれは直ちに宇宙の全面的再評価を遂げることになる。制限と思われていたものが、今や解放の不可欠の条件になる。以前は重荷・監獄以外の何もなかった場所に、今や「自由」な宇宙を持つのだ。そしてその自由は、少し前に言及された累進的顕現を通してあり続ける。創造としての生の観点からは、そのようなすべての度合いは的外れである。そのすべてにおいて、それは等しく創造的である続けるのだ。創造による解放はすべてにおいて同じなのである。

さしあたりわれわれは「解放」について話しているので、さらにこう自問してみよう。創造の見地からは、何が絶対または完全な解放を構成するのだろうか？ 創造の目的に関するかぎり、間違いなくそれは、用いられた材料の中で働いている創造的観念または意志が、この材料が必要とする特殊な技法によって、それ自体の完全な自己実現を成し遂げる時である。なぜならこれは、観念とその実現との間にいかなる障害物も介入しなかったことを意味するからである。他方、創造のプロセスに関するかぎり、そのような自由が最高度にあるのは、創造的エネルギーが完全に易々と自発的に働く時 楽々と、かつ的確にそれがめざしているものを達成する時 である。このように、易々と自発的に完成を遂げることが、創造的自由の十全な公式である。

われわれの顕現した宇宙の哲学では、生 がそれ自体の内側で、易々と自発的な完成を遂げつつ創造しているということをもしわれわれが示すことができれば、これは、その宇宙の中で創造しているという意味で、生 は自由であるということを示すことと同じことであろう。ここで問題になっている自由は創造的自由であり、それは、あらゆる場合に、たまたま 生の働き

の場になっている材料の中で、またそれを通じて　さらにその材料を用いるテクニクによって　実現され、しかもそれによってそれ自体の純粹さと完全さを少しも失うことはないであろう。そうしたあらゆる完成した達成において、　創造としての生　はそれ自体の絶対性を実現するであろう。完成があるところではどこでも、　絶対　は解放を見出したと見なされなければならないであろう。

しかしながら、クリシュナムルティの哲学で大きな役を果たしている、「自由としての完成」というこの微妙な難問を離れる前に、説明されなければならないさらに二つのポイントがある。その一つは、すべての完成の特殊性に関わっている。もう一つは、いずれか任意の完成と、生の全体との関係を扱っている。いずれの場合にも、われらが彫刻家が再び例証に役立つてくれるであろう。

### 完成は特殊のもの

もし彫刻家が仕上げた彫像が生きた人間の機能を備えていなければ、それが考えたり、動いたり、話したりできなければ、それ以外のすべての点では完璧でも、完成しそこなっていると見なされるべきであろうか？　明らかに「否」である。彫像の完成は特殊な種類の完成である。彫刻術に特有で、その術に固有のもののみを含んだ。再び、われらの彫刻家が乞食の老婆の写實的半身像にとりかかっていると仮定した場合、その半身像が完成した時、単にそれが女神

アテーナーまたはアフロディーテーの理想化された半身像よりも美しくないというだけで、彼はその制作意図の点で 完成しそこなつたと見なされるべきであろうか？ 再び「否」である。なぜなら、任意のいづれかの芸術作品の完成は、その特殊な作品の完成だからである。そして、これ以上のいかなるものもそれには要求されない。そのようなあらゆる完成は独特のものであり、それと他の完成との間には、主題の優劣の格付けに基づいた比較評価はありえない。そういうものとして、女神の完璧な彫像は、乞食の完璧な彫像よりもより多く「完成」しているわけではない。

こうしてわれわれは、完成は常に特殊のものである、という重要な一般化を得る。各々のものにそれ自身にふさわしい完成があり、そしてそのような各々の完成はそれ自体にとつて十分なのだ。したがってわれわれはもう一度あの 絶対 の観念 それ自体の絶対性を少しも失うことなく、特定の創造的行為の範囲内で実現しうるそれ に戻る。この観念は難解だが、しかししっかりと固執されなければならない。なぜならそれは、「創造性」の公式から出てくる最も重要なものの一つだからである。

さらに、生きた創造的個性の持ち主である彫刻家は、もちろんどの作品でも完成をめざしているとは仮定してであるが、彫像によりも小彫像に、あるいは派手な作品によりも地味な作品に、その生きた個性をより少ししか注ぎ込んでいないと見なされるべきであろうか？ 明らかに否である。それらのどれにも彼は自分自身の全部を投入しているのだ。彼は不可分の個人として創造しており、完成された作品は、いかに規模が小さかろうと、いかにテーマが地味であろう

と、全人の表現として仕上がっている。その上、そのような大小のあらゆる作品は、創造的觀念の「解放」と見なされた場合、等しくかつ同様の解放である。各々の場合に、もし作品が完全に成し遂げられたなら、全面的な解放がある。かくしてわれわれは、遠大な哲學的価値のもう一つの非常に重要な一般化を得る。すなわち、創造的な生はあらゆる創造的行為の中にみずからの全部を実現し、解放するが、にもかかわらず、永久に無尽蔵であるということ。また、絶対は、特殊物の中にそっくり入り込み、みずからの絶対性をそれに付与することができるが、にもかかわらず同時に他の無数のそのような特殊物の中にも等しく入ることができるということである。要するにわれわれは、創造の用語に翻訳された宇宙では、特殊物は、もしそれが表現することになつてゐる觀念を完全に體現していさえすれば、それはそのまま絶対であり、また、そのように完成された特殊物の中で、創造的な生の全部が實現され、このようにしてみずからを実現することによつて自由を遂げるという、最も深く、最も啓発的な真理を解明したのである。

そこで、最後の數節の結果をまとめさえすれば、クリシナムルティによつて翻訳しなおされたものとしての宇宙の主要原理を把握できる。そしてこの生は、形態と物質のあらゆる見かけの制限にもかかわらず、常にそうであつたように、絶対的で、純粹で、自由のままだということとを彼がわれわれに示すことができるのは、これらの原理を創造的な顯現の中の生に適用することによつてなのである。彼はわれわれにこう告げる　自然はリアリティの牢獄ではない。それはむしろ、自由にされたリアリティまたは生なのだ。大理石のかたまりが彫刻家にとつて意味してゐたのと同じことが、創造としての生に對する形態と物質の關係に言える。それ



らは、自己実現と解放の不可欠の条件なのだ。物質密度の増大もこの創造的な自己解放を左右しない。それは技法の相違を課すかもしれないが、しかし等しく創造的解放をもたらす。言い換えれば、われわれの物質界のリアリティは、より高い世界で見出されるそれに劣らずリアリティである。われわれのまわりの事物の世界において、創造的な生は、ある種の限りなく微細な物質の世界においてとまさに同様に十分に存在しており、十分に解放されている。なぜなら解放は、その創造的な側面において、用いられている材料からも、この材料に伴う技法からも独立しており、そして、すべてにおいて等しく真実で十分だからである。

ただ一つのこと創造的自由を促すかまたは損なう。つまり、それは、吹き込まれる創造的観念を十分にかつ純粹なままで実現するかしないか次第なのである。創造にとって、完成が唯一の自由であり、そして最高の自由は、自発的に、易々と成し遂げられた完成である。そしてこれこそはまさに、クリシュナムルティは教える、われわれのまわりの自然内のいたる所に見受けられるものである。あらゆる自然物の完成において、われわれのまわりの顕現した世界は（創造性の言語で）、自然物をその表現とする、生の絶対的自由を賛美しているのだ。

自然の中のどこを見て、われわれは創造的芸術作用が働いて、それ自体の創造的観念の完璧な体现を、自発的に、苦もなく成し遂げているのを見出す。そしてここでクリシュナムルティは慎重にも、この完成の概念をそうではないものと混同しないように指摘する。美しいものは、それによって醜いものよりもより「完全」であるわけではない。より進化したものは、それによってより進化したものよりもより「完全」であるわけではない。完成は、あらゆる場合に、

事物または創造物が、それ自体の場所で、また、それ自体の種類に従って、完全かつ正確に、みずからがあるように目論まれていものであることにある。

ここで、彫刻家について言われたことが慎重に思い出されるべきである。ただし、それを顕現の全部にそれを適用するには、若干言い換えたほうがよいであろう。

「自然なる完成」 それによつて生きた顕現界内の事物の完成が意味されているのだがを考察することによつて、われわれはそれがありうる以上のものであるべきだと要求してはならないとクリシュナムルティは教える。なぜなら、その完成は事物が厳密にそのあるがままにあることにあり、それ以上ではないからである。かくして、われわれは石が植物ではないからといって、あるいは植物が動物ではないからといって、石あるいは植物を咎めてはならない。各々の「完成」はその種類に従っているのだ。あるいは、「完成」に関して、ある物が他の何かより肌理が粗い、あるいは美しくない、あるいは心地よくないからといって、それを咎めてはならない。火打石は、ダイヤモンドではないが、それ自体の完成を持っている。ヒナ菊は、たとえそれがバラではなくとも、それ自体の完成を持っている。上に述べられたように、各々のものにそれ自体の完成があり、そしてこの完成はそれ自体で十分なのである。それゆえわれわれは、自然の中に唯一の完成を探し求めてもならないし、客観的性質に基づいた一般的な完成の基準を求めてもならない。われわれは無数の完成を探し求めなければならないのであり、各々の事物、あるいは事物の種類に固有の完成があるのだ。そしてこれらの完成のどの一つをも、われわれはそれ自体で完璧であり、他のいかなる完成にもなにひとつ負わず、いかなる比較または分類の企てにも絶対

的に逆らう。ものと見なさなければならぬ。要するに、各々が絶対なのだ。各々の中に創造的な生の全部が入り込み、その中でその実現と解放を見出すのである。

### 自然性

ところで、これは、自然の中の個々の事物の完成はその「自然性」にあると言ふこととなら異ならないのではないだろうか？ あらゆる被造物は、それが自然にあるところのものであることにおいて完全になる。ヒナ菊は、その種類に従つて「自然性」を実現し、「完全」になる。そのように、微塵から人類の手前まで、自然の全域にわたつて、「自然性」と「完成」が同一歩調をとっていることをわれわれは見出す。人類においてのみ、初めてこの法則は通用しない、あるいは通用しないように思われる。が、それについてはいはずれ触れるであろう。さしあたりは、その法則は結局は人類にも通用するのだと付言しておけば十分であろう。一見して通用しないように思われるのは、創造的な生に對立する人間の中の何か他のものが、一時的に彼を「不自然」にするからである。後でその異質な要素が乗り越えられ、創造的な生が、その全き純粹さで再び人間の中で放免され、「解放」と呼ばれるものを彼が成し遂げた時、彼は「自然」になり、したがって再び完全になるであろう。

## 生 に対するダイナミックな見方

以上が、クリシュナムルティの教えの中にわれわれが見出す、「完成」としての「自然性」の概念である。その十分な意味を説明するためには、それについてかなり長く詳述する必要があるであろう。が、ここではさしあたり、それがリアリティと自然ないし顕現との関係にどう関わっているかにだけこだわることしましょう。この関係がどういうものかを指摘するために、多分、十分に多くのことが言われてきた。クリシュナムルティは教える

生 あるいはリアリティは、  
顕現界のあらゆる場所において自由かつ絶対である。あらゆる被造物は、自然の秩序内で、みずからの中に吹き込まれた創造的観念の純粹な表現であるという、単純な理由のゆえに。単にそのあるがままであることによつて、単にそれ自体の「自然性」を実現することによつて、それは、それを形作り、形成している 創造的な生 にとつて、顕現し、完成を遂げているのであり、したがつて（創造性の言語で）自由な存在なのである。形而上学的に言えば、そのようなあらゆる事は究極のものである。それは、絶対的な純粹さで 生 の自由と豊かさを顕わすのだ。

かくしてわれわれの宇宙は放免される。いわば 生 についての 静的な概念を、動的な概念に取り替えることによつて、顕現の全構造に緩みが生じ、以前は闇に閉ざされ、息を止められていた場所に、光と新鮮な空気が入り込んだのだ。自然を人間とリアリティの間に介在する障害物 人間のスピリチュアルな切望に敵対し、人間存在の最も深い本能と相容れない障害物 にしてきた重荷と圧力が、これを最後にすべて廃止されたのである。もはや人間は、重荷を中和

することによって彼のスピリチュアルな自己実現を企てる必要はない。なぜなら、今や中和すべきいかなる重荷も残っていないからである。彼はもはや逃避を企てる必要はない。なぜなら、今や逃避すべきいかなるものも残っていないからである。彼が求めているリアリティは、もはや他所者ではない。それはここに、彼のまわりのあらゆる所に、あらゆる被造物の自然な完成の中にある。詩人たちが自然について常に夢見てきたすべてのことが、本当になったのだ。彼女（自然）は今や、「リアリティ、自然、人間」の偉大な有機的総合の中の間項としての場所を占めることができるのである。

### 絶対的価値

これが、人間が自然の中に現われる時、その中に生まれ落ちると思われなければならない宇宙である。すなわち、各々がそれ自体で絶対で、各々が独特の創造的作用の産物で、その特殊な完成を実現することにもっぱら関心がある、そういう個々の無数の完成物から成る宇宙である。したがって、事物とそれを創造した生との間の単純で根本的な関係、および、まったく同一の生の現れとしてのそのようなすべての事物同士の単純な相互関係以外のいかなる関係も仮定することのできない宇宙。要するに、その中では生それ自体が唯一の共通要因であり、唯一の可能な関係である、そういう宇宙である。これが、リアリティのために存在するものとしての自然であり、その中のあらゆる事物が絶対的な創造的自由のしるしであるがゆえに、また、

自然は全体としてそのような事物の集合体であるがゆえに、徹頭徹尾自由な世界である。したがって、この種の世界では、個々の事物の完全無欠性を束縛し、損ないうるいかなるものもありえず、事物が、その性質、価値、あるいはそれらが仕えることになって何らかの目的によつて分類されることもない。

### 価値の等級づけの不在

生 がみずから創造した自然を見渡す時、それはいかなる共通の性質も見ず、ただ唯一無二性（独自性）だけを見る。それはいかなる価値の等級づけも見ない。あらゆる事物は、単にそれ自身であることにおいて、独自の絶対的価値を持っているからである。またそれは、その創造物のいずれかを他のいずれかに縛りつける、いかなる目的も知覚しない。なぜなら、そのすべては唯一の目的を持っており、その目的とは 生 それ自体を表現することだからである。が、これは、ある高さから放たれた水が落ち着き先を求めること、あるいは、同様に放たれたある固体が地面まで落下することがそれぞれの「目的」と呼べないのと同様、目的と呼ぶことは難しい。

生 は、それが 創造 であるがゆえに創造する。それが、われわれが言うすべてである。このように、私と鏡の中に映っている私の姿との間に意図的な関係がないのと同様、 創造としての生 とその顕現との間にはいかなる意図的な関係もない。私が鏡の前におり、ゆえにその中に私の姿が映る。 生 は創造であり、ゆえに自然がある。が、私がガラスの中の自分の姿によつ

て何も意図しないのと同様に、生 は自己顕現によって何も意図しない。

さて、人間の真の住処であり（もし彼がそれを知りさえすればだが）、その中で彼が自分に定められた役割を果たさなければならぬ宇宙 目的なき、関係なき宇宙、単に 生 の顕現または表現である以上のいかなる意味も 生 にとつては持たない宇宙 について述べるべく努めたので、次に人間自身について考えてみることにしよう。何が彼の役目で、またそれによつていかにして彼はわれわれの有機的三つ組（リアリティ、自然、人間）の第三項になるのだろうか？ われわれは、創造としての生 が、それ自体に内在するはずみによつて顕現の中に移行したことを見た。では、さらにこの 生 を同じ有機的自己展開のプロセスによつて遂行し、その自然の中での単なる顕現を超えて、人間のためにそれを配置する必要がなぜあるのかを見てみなければならぬ。

われわれが話してきた「自由な」宇宙では、被造物の完成は単純な創造的行為の完結、または極致を表わしている。かくして、たまたま私が手にしているこの特定の花または石を創造した行為は、当該の物の完成または自然性において自己実現または自己完結を遂げ、したがって自然全体が無数の「完成物」で埋め尽くされると見なされなければならない。あらゆる場合に、一つひとつの事物に入つてその唯一無二性を具体化した 生 のはずみは、それが成し遂げた完成物の中で休らうようになる。そのようなあらゆる完成物は、この観点から言えば、最終状態を表わしている。それは、画家によつて画架上に仕上げられた絵に相当する。が、もし子細に見てみると、創造としての生 が たとえいかに完全に創造したとしても 欠いているもの、ま

た、そのような創造的完成物がいくつあってもけつして満たすことができない欠落を見出すのは、まさにここなのである。もし完成を成し遂げた「生」が十分な形而上的自己実現と自己解放を遂げたいなら、被造物の完成に追加されなければならない何か他のものがあることに気づくであろう。実は、まさに完璧に創造するという行為において、完成の証しである純粹さと自由同様に不可欠の何かが失われてしまったのだ。

### 流動性の喪失

その「何か」とは、その流動性<sup>モビリティ</sup>である。純粹性と自由は残るのだが、しかし創造のはずみ<sup>ミ</sup>が停止してしまつたのだ。そのため、創造としての「生」として事物の中に入ったものが、その後「創造者」としてではなく、純粹「存在」としてその中に留まる。それに起こつたことは、彫刻家が自分の創造的觀念を完全に表現することに成功した時、彼の創造衝動に起こることである。すなわち、それ以後は彼の衝動は創造的でなくなり、彫像に内在する「生命」または「存在」になるのである。

すべての自然物の完成は、それゆえ、「生」として二つの相反するものを意味しているものと見なされなければならない。創造的行為の完結した実現として、それは、それを作り上げた「生」に創造的自由を与えるものと見なされなければならない。同時に、それはその「生」の運動をさえぎるものと見なされなければならない。「生」の絶対性に属する他のあらゆるものはな



おそのまま残っている。が、創造としての生は、まさに完全な自己客観化を遂げることによって、その生きいきした運動の点でそれ自体ではなくなり、まさにその精髓たる前進的はずみ、み、をなすのである。

### 運動回復への切望

このように見られたものとしての客観的顕現の世界　あるいは自然界　は、生　の解放であり、かつ拘束でもあり　その肯定であり、かつ否定でもある。それを出現させた創造的プロセスに関しては、それは解放である。完成が遂げられた後に存在し続けている完結した事物の集合体としては、それは拘束である　これらを作り上げる上で活動的で創造的であった　生　は、今や、純粹「存在」として、それらの各々の中にいわば監禁されたからである。そうであるがゆえに、事物への単純な自己顕現の行為が　生　に究極的満足を与えることはできないということが明らかになる。それどころか、そのように顕現したあらゆるものの中に拘束されている　生　の側には、あの失われたはずみ、　生　のまさに精髓であるあの創造的前進運動を回復しようとする深い形而上的「切望」が働いている。十分な自己実現は、それが再び創造的で活動的になった時にのみ、成し遂げうるのである。

## 創造的はずみの回復

これがあの失われた要素、「リアリティ、自然、人間」の有機的総合を実現するにあたって、第二項（自然）での完結の後に第三項（人間）へと向かう本能的傾向である。ちょうどみずから自然の中での自己顕現へと向かわせたことが、創造として思い描かれた生に固有の内的必然であつたように、生をこのさらなる探求へと駆り立てることが、創造としての生のさらなる内的必然なのである。どういうわけか、完成したものととしての事物が拘束してしまつた創造的飛躍を、生はみずから回復しなければならぬのだ。そして、そうしなければならぬだけでなく、それはまた、絶対に創造的な生に属するあの限りなくすべての豊かさや自由の中でそれを回復しなければならぬ。要するに、純粹な創造性が再確立されねばならないのである。なぜなら、その時にのみ、純粹「存在」として事物の世界に監禁されている生は、再び創造としての生になるからである。

## 客体を通じての回復

そして、われわれのテーマの困難な部分に出くわすのはここである。というのは、「いかにして生がこれを遂げるべきなのか？」とわれわれが問う時、そのはずみは、まさに今それを妨げているものの力によってのみ回復されうる、というのがその答えでなければならぬからだ。

失われた飛躍を、顕現を犠牲にして再発出させるようにすることはできない。客体の中に拘束された生が解放を見出すことを可能にするため、客体を廃止することはできない。また、生は、自然から撤退して、新規時き直して創造し始めるという単純なやり方によって、その形而上的はずみを回復することもできない。一つには、これは、まさに創造としての生に属している「前進性」を否定することになるであろうから。二つには、たとえそれが新規時き直して創造するとしても、それは結局はみずからの創造物の中に監禁されることによって終わり、したがって以前と何も変わらないであろうから。

ただ一つのやり方だけがある。そしてそれは前進することだ。生はなんとかしてそれ自体の顕現の世界へと前進し、その中に出現することによって解放を見出す。そしてそれが再びみずからを始動させ、それによってみずからを「存在」から「活動」へと脱出させるためにしなければならないことは、客体から退却することではなく、客体の側へとさらに突き進むことである。明らかだが、これは生の運動を単に拘束するだけでなく、それが通過するのを許すような客体、言い換えれば、創造的な生の終点ではなく、焦点となるような客体を創造することに成功した時のみ、現実のものとなる。その時、およびその時のみ、それは自由に使える道具を鍛造し終えるであろう。そのような焦点としての客体を通してのみ、生はみずからの創造物の世界内での監禁状態からみずからを抜け出させ、創造的になることができるであろう。

## 主体 客体としての人間

手短かに言えば、そのような客体を 生 は人間の中に見出す。自然を通じての 創造としての 生の有機的展開において、人間は第三項として現われる。なぜなら、この形而上的欲求が満たされるのは、彼の中で、また彼を通じてだからである。純粹「存在」が再び創造性の中に解き放たれるのが人間を通じてであるのは、彼が自然の中の他のいかなるものもこれまで成功しなかつた存在だから すなわち、客体であると同時に主体だから だという、単純な理由のためである。対称的な二面を有する彼は、客体として自然を振り返って見、そして主体として自然から目を転ずる。そして客体としての彼の中に入った 生 を「存在」からいわば引き出して、「活動」に移し、それを向こう側で創造的に表現することができるのは、彼の主体性によってである。そして彼が主体であると同時に客体であると言うことは、単に、彼の中で初めて 自然の中の生は セルフ・コンシャスネス 自意識 へと開花すると言うことである。「リアリティ、自然、人間」の連鎖の中の「人間」は、そこでリアリティが セルフ・アウェアネス 自覚 へと目覚め、再び 創造としての生 になるべく放棄される、そういうポイントを表わしているのだ。

## 連鎖の有機的性質

これが、「リアリティ、自然、人間」の連鎖に沿った ワールド・プロセス 世界過程 の段階的展開の中での人間

の意義である。そして今、なぜこの過程が「有機的」<sup>プロセス</sup>として述べられたかを見ることができる。それが「有機的」なのは、各々の段階が他の二つに不可分に結びついているからであり、また、その全部が深い内的必然によって展開していくからである。生は、創造であるがゆえに、みずからを 顕現 の中で表現することは自然であり、必然であった。そして、まさにそれ自体の顕現した客体の世界の完成の中にいわば監禁されてしまった 生 が、「創造的活動」としてのその本質であるあの流動性を回復するために、それらの客体を貫通することによって救いを求めることは、等しく自然で、必然であった。生が 生 であるためには、このすべてが起こらなければならなかったのである。かくして、不可分の連鎖が続く中で、各々の項は次のそれを予想し、先行したすべての項をみずからの中に寄せ集めていく。

それゆえわれわれは、ちょうどすでに考察してきた二項（リアリティと自然）が必然であり、自然であったように、世界過程が次の段階へと展開していくのについていき、創造としての生の永遠の物語がいかんにして完結し、有終の美を飾るかを見ていかなければならない。われわれは、総合の第三項としての 人間 に到達した。今度は、クリシュナムルティの教えの中で、何が偉大な展開の中で人間が果たすべき役割か、また、どのようにして以前去ってしまったすべてが彼の中で寄せ集められ、極点に達せられるかを見てみなければならぬ。そこで、これができるだけ明らかにするため、最後の数節の主題にやや長く思いを凝らし、われわれが言ってきたすべてに照らして、「人間とは何か？」やや詳しく述べてみよう。

人間とは何か？

彼は、まず第一に、彼の究極的なスピリチュアルな唯一無二性（独自性）において、すでに討論したあの「自由」で「単純」な世界の中の一つの客体である。個々のあらゆる人間存在は、別個の完成体として、他の無数のそのような完成体と並んで、または客観的自然を構成する他の無数の完成体と並んで、自然体として、形而上的に創造としての生のために存在する。そして彼は一個の完成体であるがゆえに、また一個の絶対物である。まったく独特な存在であり、またこの独自性によつて、他のいかなる完成体との関係または比較からも超絶した存在である。そのようなあらゆる生きた個体には、単にそれが完全であるがゆえに、創造的な生の全部が入り込んだにちがいないということを見るためには、そういつたすべての創造的完成体について言われてきたことを思い出しさえすればいい。それゆえ、あらゆる人間は、自然の中の一個の客体として、彼の独自性のおかげで完全であり、そしてそれと同じ理由のために、生の全体の表現である。そしてこの生は、人間が客体であるかぎり、彼の中に監禁されており、彼の「存在」として彼の内側に留まる。純然たる客体としての人間の本性の根底には、普遍的であると同時に独特の「存在」がある。そしてこの「存在」を、われわれは彼の「恒久資本」「人間」としての彼に属しているのだが、しかし彼が単に客体であるかぎり、地下金庫室に隠され、寝かされたままの無尽蔵の基本的富と見なすことができるであろう。

が、人間は、客体であると同時に主体でもある。そして主体であるがゆえに、彼は創造的にな

ることができるのだ。これは、彼が「存在」あるいは潜在物の中から自分の隠れた富を引き出して、それらを再び循環させる力を発揮することを意味している。そしてこれこそはまさに、われわれの公式（リアリティ、自然、人間）によって彼がすることになっていてあることである。なぜなら、創造的であることは、彼の最も内奥の「存在」を「活動」へと移し変えることに他ならないからだ。創造のあらゆる行為は、かくして、遊休資産を現金に換えること、つまり、すでに人間のものである何かを創造的エネルギーに変換することである。かくしてわれわれは、次の一般化に至る。人間は、形而上的存在として、何かになる必要はない。なぜなら、彼はすでに絶対的本質であるから。彼は単に、自分のありのままを表現し、それを解放し、そしてそれを現行貨幣に変換しさえすればいいのだ。そしてその目的は、彼が自分の「存在」の全部を、等式の対辺へと移した時、言い換えれば、彼の内なる「生」がそっくり「創造」として解放される時、絶対的「存在」が絶対的「活動」に変わった時、に遂げられるであろう。その時彼は、最も十分かつ純粋な意味で、「生」と一つになるであろう。創造としての「生」は、人間を通じて、その元々の純粹さにおいて、しかも今や自己を意識しているという追加的栄光とともに、自己実現を遂げるであろう。このすべてが起こるためには、人間は、「生」それ自身が自然の中で最初に自己顕現する時に示す自由、完全性および易々たる自発性でもって創造することをおぼえなければならぬ。

かくして、絶対的な「創造としての生」になることがあらゆる人間の目的である。そして彼が「生」の過程プロセスの輪を完結させ、それを元々始まったところまで導くのは、それ（絶対的な「創造と

しての生)になることによつてである。それゆえ今度は、この文脈において「創造」によつて何の意味されているのか、われわれは自問してみなければならぬ。人間が「創造している」と言う時、この言葉によつて何をわれわれは意味しているのだろうか？

### 人間の創造性

人間の創造性は、自然の中で働いている 生 のそれと同じではありえない。人間のそれは反対方向に動くという、単純な理由のためである「原注 方向の変化は、実は円の中に見出すそれである。一つの円の下の向きの弧と上の向きの弧は、ある観点からは反対方向に向いているが、しかし後者は、前者によつて立てられた曲線の連続にすぎない」。最初の創造は、一つの 生 が顕現した宇宙のすべての無限の多様性の中にみずからを現わすやり方でのそれだった。そしてその運動は、それゆえ、 生 から始まって客体(物)で終わるものとして述べることができるだろう。なぜなら、客体は、その運動が成し遂げるべく企てたものの完結した実現を表わしているからである。が、今や変化が起こつた 客体が創造的主体になつたのだ。ある創造的過程の終点であつたものが、他の創造的過程の出発点になる。 生 から発せられてその目的と実現を客体の中に見出したものが、今や(主体になつた)客体から発せられて、その目的と実現を見出す。どこに？ 明らかに、 生 の中に。



## 意義の創造

以前の創造性が 生 において始まったように、新たな創造性は 生 において終わる。それは、客体（物）ではなく、 生 それ自体を創造しなければならないのだ。では、いかにしてそれは 生 を創造することができるのだろうか？ ごく単純なやり方で つまり、それを再発見することによって。言い換えれば、その課題は、総体として人間の環境を構成し、 むろん、彼自身のような他のすべての人間を含む、 広大な客体（物）の複合体を創造的に扱い、また、そうすることによって、それらをその一見した客観性と外在性から、真にあるがままのものとしてのそれら すなわち、 生 それ自体の表現 へと再創造することである。別の言い方をすれば、これは、それら（広大な客体（物）の複合体）をそれら自身の元々の根本的リアリティの用語へと翻訳しなおさなければならない。それらが何を意味しているかを発見しなければならない。ということである。人間のずつと向こう側にある 生 が、「意義」に関して取り戻さねばならないのだ。元々の創造の単純な行為によって客体の中に入り、それを独自の完成物、自然物にしたすべてのものが、今やその意味を解明する過程によって再発見され、その 源 に帰されなければならないのである。

かくして「創造」は、人間の中での新たな冒険に乗り出す時、より正確には「創造的解釈」と呼びうるものになる。そのような創造は「自然の秩序」を妨害することも、それに追加することもない。それは単に、徹底的に「自然の秩序」を意義で燃え立たせることによって、すでに潜在的にそこに含まれている価値と意味を創造的にそれに帯びさせることによって、それを変容させることである。もしわれわれが一人の画家　ある神聖なオートマティズム（無意識的自動作用）により、自分が何をしたかを知ることなくいくつかの傑作を創造し、それから自身自身の仕事の最中に目覚め、徐々にそれらの作品の驚異と美を知覚するようになり、自分自身の天才の奇蹟に気づいて驚喜する　そういう画家を想像することができるなら、　生　が人間の中の自意識へと目覚める時にそれに何が起こるかについての感じをつかめるであろう。われわれが単純な顕現の世界として言及してきた、あの個別の完成物あるいは唯一無二性（独自性）から成る宇宙を具体化するという、元々の創造においては、　生　は完璧に創造したのだ。なぜなら、　生　であるがゆえに、それはそれ以外のやり方では創造できなかったからである。が、芸術的手腕は無意識であった。それは、木が葉を出すように自然で自発的だったのである。したがって、そこには美と完成はあったが、それらは意義を欠いていた。なぜなら、それらを讃<sup>たた</sup>える意識的、精神がなかったからである。しかしながら、それらすべての完成物の豊かさの真価を正しく認め、理解することができる知性が出現するやいなや、客体（物）の全宇宙は変貌する。その時には、

いわば顕現界は内側から照らされる。あらゆるものは客観的にこれまでどおりだが、しかし同時にあらゆるものはきわめて重大な変化を遂げる。なぜなら、価値と意義が生まれたからだ。その時、生 にとって創造の真の恍惚が始まるのだが、それはみずから創造的に再発見したことの祝福でもある。

### 逆転した創造

主体でもある客体をようやく作り出した 生 が放免されるのは、そのような逆転した創造の中にあり、与えられた主体という焦点を通して、それはさらなる創造の旅に乗り出す 顕現の織物のあらゆる糸をほぐし、各々を金色の「意義の撚り糸」に変える、そういう創造の旅に。本の著者がその読者になる。歌の作り手がその歌い手になる。自然は単に客体（物）から成る世界ではなくなり、無限の意味の宝庫として開示される。そしてこの意味を看破することによって、生 はおのれ自身を知るに至る。もしわれわれが ワルト・ブロッサ 世界過程 中の人間の場所と役割を定義する公式を求めるとすれば、それはおおよそ次のようになるであろう。「リアリティ、自然、人間」の有機的総合の中での「人間」は、創造としての生 が自意識へと目覚め、それ自体の仕事の創造的解釈によってそれ自体の実現に至るために使う、生きた道具である。

## 創造の焦点としてのあらゆる個人

そして、ここでわれわれが言う「人間」とは、抽象的な人間でも、総体としての人類でもなく、あらゆる具体的な個々人である。なぜなら、創造的な解釈という「生」の仕事は、あらゆる個人を通じて起こり、結局はあらゆる個人の中でみずから実現しなければならぬからである。各々が、あの偉大な自己発見のプロセスのための焦点としての役を果たさねばならないのだ。

## 目標

そして目的は、人間の自意識を介して、生きた創造の原理が、元々の自由な状態でそうだったように、絶対的な完成の容易さで働き出す時に、広大な顕現の全宇宙の中で、その創造の原理がその究極の意義、すなわち真理の用語へと即座にかつ的確に解釈することができないいかなるものも残らない時に、達せられるであろう。この最高の境地において、個人は「生」と一つになるであろう。なぜなら、彼の存在の全部が純粋な創造的活動に変質したからである。そしてこれが起こる時、われわれの総合の三項（リアリティ、自然、人間）は別々ではなくなり、一つに結集し、融合する。なぜなら「生」は、自然を解釈することによって彼女を取り戻すからである。二者は一体になり、有機的な自己同一性（主体と客体の一致）に移る。そしてまさにそれと同じプロセスによって解釈を繰り広げてきた「私」は、とうとう自分が「生」の「私」に他ならぬ

いことを知る。偉大な宇宙の物語の最後に、自分自身を 創造的な生 として実現し、自然を生きた有機体としてみずからの内に包み込んだ人間がいる。各々の「私」は、その最高の照明の中で自分自身の中に他のすべての個人を包含するのだ。

### あらゆる解釈の独自性

しかし、この自己実現のプロセスは万人にとって同一なのだろうか？ あらゆる人間は残りの全員の経験を単に繰り返すだけなのだろうか？ 否。なぜなら、あらゆる個人は彼の本質において唯一無二（独特）なので、彼を道具としてなされる解釈は、その独自性の特質を帯びる。人間を通じての 生 自身のそのようなあらゆる再発見は、 生 にとって新鮮な冒険である。本は何度も何度も読まれるが、その都度読み手によって新たに読み直される。 純粹存在 として発出した 生 は、生きている人間の数だけ多種多様な個性的表現で、「意義」として元に戻ってくる。

### 限らない創造

そして、確かにそうでなければならなかったのだ。 と言うのは、そのような果てしない自己増殖の能力は、少し考えてみればわかることなのだが、 創造としての生 という全観念の中に最

初から潜在していたからである。生は創造であり、また無限なので、ぜひと無限に創造し続けねばならない。それはみずからを増殖させ続けながら、ひたすら前進し続けていかねばならないのだ。そしてこのプロセスには、形而上的に言えば、終りはありえない。かくして、単純な顕現の宇宙を構成するあの無数の独自性を具体化した時、それはそこで休止することはできない。これらの各々は順次中心にならなければならなかったのであつて、そこから創造の全プロセスが新たに始まることを可能にする。その上、そのような新鮮な創造が単に数値的な追加であるだけでは十分ではない。それは、種類においてまったく新しくなければならぬのだ。このようにして、増殖は量的であるだけでなく、また質的でもあり、それは永久に続かなければならない。単純な顕現それ自体はけつしてやまないという事実によって可能になる永久性。客体（物）の創造は常に補充・更新され、そしてこれらの各々がすべて、遅かれ早かれ主体になるポイントまで駆り立てられなければならない。なぜなら、この駆動力は生それ自体に固有のものだからである。したがって新しい焦点が次々と現われ続け、その各々がその独自性の純粹さにおいて生に新鮮な自己表出を与える。要するに、われわれは生の神秘に直面しているのだ。永久に同じであり続けながら、果てしなく自己増殖し続けるという。

最後の数節はわれわれをやや高次で抽象的な領域へと踏み込ませた。が、原理自体は明らかだと私には思われる。自分のまわりの宇宙をその生きた「意義」の用語によって解釈し直し、ついには生が元々持っている意味の純粹さと豊かさにおいてそれを理解し、感じるようになること。それがあらゆる人間の役割である。そして彼がそうすることができる時、彼は生と一

つになるであろう。なぜなら、顕現した客体のあの全世界への単純な関係が生が客体の世界を創造した時には無意識だったのに対して、十分な意識をもって彼自身の内側に確立されるであろうから。生の「目」は人間の視角を通じてビジョンへと目覚め、生の「心臓」は人間の心臓でもって鼓動することを覚えるであろう。

そしてこれは、あらゆる人間が自力でしなければならないことである。なぜなら、独自であるがゆえに、彼は他の誰にも助けを求めることはできないのだ。彼は、生がその普遍性を彼に授けるのに応えて、彼の独自性を生に提供しなければならぬ。彼は、徹底的にかつ断固として彼自身になった時初めて、真に解釈し始めることができるのだ。

### 究極の動詞

かくして、われわれの創造としての生の公式に照らして、人間の高次の、またはスピリチュアルな生におけるあらゆるものは、創造的に再創造または解釈によって表現されねばならない、ということがわかる。スピリチュアルな生における究極の動詞は、「作る」または「創造する」ことであって、受動的な意味で「ある」ことではない。人間は、その日常生活において、習慣的に行使用することができる創造的解釈能力を持っている。彼の世界は、任意のどの瞬間にも、彼がそれに読み込むことができた意義の度合いと性質である。それゆえ、彼の再創造性の完成に、彼自身と彼の世界の両方の完成があるのだ。そしてこれらの両者が完成に至るのは、易々たる、

自発的な確かさで、刻々に彼に経験することを迫ってくる顕現の全宇宙を、その究極の美と真理の限りない深さと豊かさへと翻訳して戻すことができる時である。

そのような創造的理解と感情の完成の中に、スピリチュアルな存在としての人間の最終的自己実現がある。が、最終的ではあるけれども、それは実は最後ではない。それはむしろ始まりなのである。なぜなら、彼が純粹な解釈の生きた原理になった時に初めて、彼は自分の十分な形而上的「人間性」を実現し、「リアリティ、自然、人間」の有機的総合の中での真の生活に入るからである。クリシユナムルティの教えにおいては、人間は、生と一つになるやいなや、形而上的「人間」になるのだ。